

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

本当の愛

青森県 八戸市立大館中学校 三学年

阿部 倫歩

去る二〇一一年三月十一日、東日本大震災を境に私の親族は暗い日々を過ごすことになった。

私の父方の親族は宮城県東松島市に住んでいる。震災直後は連絡が取れず状況が全くわからなかったのだが、少しずつ状況がわかってくると、「信じられないこと」ばかりが現実として、のしかかってきた。伯父の住む家は海の中に沈んでしまい、その家の中には伯父の義父が逃げ遅れたままだったという事実を知らされ、私たちは信じられない思いで数日過ごしていた。伯父は三カ月間避難所をまわったが、義父を見つけることはできず、その後しばらくして確認したのが義父の遺体だったということを知った。もちろん私たちにとっても人ごとではなく、いろいろな心配して相談をくり返した。ガソリンが思うように手に入らず、また被災地の道路復旧がままならない中、現地に行くことは不可能だったが、いつも頭の中は宮城の親戚のことでいっぱいだった。住む家も土地も財産もそして義父も全て失った伯父たち家族のことを考えると苦しかった。

八戸も物資は不足していたが、家の中にある物をできるだけ送った。郵便局までしか配達はできないと言われたが、それでも送らずにはいられなかった。そんな慌ただしい日々がしばらく続き、何がなんだかわからなくなりそうだった。両親は、八戸に親戚を呼んで生活することも考え、提案していた。そんな中、連絡があった。宮城でがんばって生活していくから大丈夫という内容だった。驚いて聞いてみると、義父が保険に加入していて、そのおかげで家族が路頭に迷わずにすんだということだった。正直、私は驚いた。あんなに悩んで、言葉も発せられないくらいに落ち込み続けた日々が、加入していた保険によって、一筋の光が差し込まれたかのように前向きに動き出したのだ。これまでの自分の考えが百八十度変わった瞬間だった。保険金という言葉に対して少し嫌なイメージをもっていった私だったが、残された遺族に安心と笑顔を取り戻させたのは保険金だったのだ。

元気な時から掛金を払い続けていた義父は、自分に何かあった時

第55回中学生作文コンクール

に残された家族のためにと考えていたのだろう。それは、まさに見えない未来に向けた家族へのプレゼントのような気がする。親戚は、口々に

「お父さん、ありがとう。私たちのために。負けないで生きていくからね。」

と話していた。義父の愛を確かに受け取り、強い気持ちをもち直し、生きていこうとする姿は美しいと思った。

義父に限らず、誰にだって何が起こるかわからない世の中である。でも何か起こった時に、残された家族、愛する人たちが困らないように考えて加入するのが保険だとあらためて知った。私の父は、私が小さい頃から、よく

「お父さんに何かあってもお前たちが困らないように保険も入ってるし。」

と言っていた。単身赴任ばかりの父がそんなことを言うのを「縁起が悪い。」と言ってさえぎっていた私。でもあらためて考えてみると、これは父の本当の愛の証なのだと思う。日本中をとびまわっている父だからこそ、保険に加入し家族を守ろうと考えていたのだと思う。

「お父さん、ありがとうね。」
と言うと、

「何を急に。お前が大きくなるまでは心配いらなからな。」

いつものように、ニカッと笑う父。これから先、不幸なことが起こらなければそれに越したことはない。でも何か起こった時でも、俺はお前たちを守るぞ、という父の強い思いが、その笑顔の裏にかくれているような気がした。

お父さん、本当にありがとう。